

とにし

日蓮大聖人御真筆写

発行所

日蓮正宗法華講妙縁寺支部
〒130-0001
東京都墨田区吾妻橋2-2-10
TEL 03(3622)5086
FAX 03(3829)2766

第372号

光久御住職御書講義

経王殿御返事

南無妙法蓮華経は師子吼(く)の如し。いかなる病さは(障)りをなすべきや。鬼子母神(きしもじん)・十羅刹女(じゅうらせつによ)、法華経の題目を持つものを守護すべしと見えたり。さい(幸)はいは愛染(あいせん)の如く、福は毘沙門(びしゃもん)の如くなるべし。いかなる処にて遊びたは(戯)ぶるともつ、(慈)があるべからず。遊行(ゆぎよう)して畏れ無きこと師子王の如くなるべし。十羅刹女の中にも卑諱女(こうだいによ)の守護ふかゝるべきなり。

但し御信心によるべし。つるぎ(剣)なんども、すゝ(進)まざる人のためには用ふる事なし。法華経の剣は信心のけなげ(健気)なる人こそ用ふる事なれ。鬼にかなぼう(鉄棒)たるべし。(御書六八五頁)

《通釈》

南無妙法蓮華経は師子が吼えるようなもので、どのような病も障りもなす事が出来ない。なぜならば鬼子母神やその娘である十羅刹女等の諸天善神が、必ずこの御本尊を受持する者を守護してくださるからである。幸いは愛染明王のように、福は毘沙門のようによくわたりていくであろう。いかなる場所でも遊び戯れても、災難に遭うはずがない。まさしく悠々と遊行して恐れのない師子王のようである。十羅刹女の中にも卑諱女の守護が特に深いのであろう。

ただし御信心によるのである。剣などというものは、勇気の無い人のためには何の役にも立たない。法華経の剣(南無妙法蓮華経の御本尊)は信心の殊勝の人が用いる時こそ役に立つのであり、これこそ鬼に金棒なのである。

解説

本抄は文永十(一二七三)年八月十五日、大聖人様が五十二歳の御時、佐渡の一日(いちのさわ)においてしたためられました。かつては、四条金吾殿に与えられたお手紙であるとの説もありました。その確かな根拠はありません。また、御真蹟も現存していません。

対告衆について詳しい事は判りません。しかし、「経王御前にはわざはひも転じて幸(さいわ)ひとなるべし」とあり、また、「淨徳夫人・童女の跡をつがせ給へ」とある事から、経王御前の母に与えられたお手紙であると推測されます。

本抄の前年にしたためられた『経王御前御書』に、「経王御前を儲(もう)けさせ給ひて候へば、現世には跡をつぐべき孝子なり。後生には又導かれて仏にならせ給ふべし」(御書六三五頁)と、経王御前がめでたく誕生されました。しかし、経王御前の母にとつては喜びもつかの間、誕生間もない経王御前が病魔に冒され心を痛める日が続きました。そこで佐渡におられる大聖人様に御報告申し上げ、大聖人様はさつそく経王御前の病気が平癒するよう御本尊様をしたためられ授与なさつたのであります。大聖人様の御魂は法華経文底の肝心・南無妙法蓮華経であり、この御魂の南無妙法蓮華経を墨に染め流し頭され給うたのが御本尊様であるとお示しであります。獅子が獲物を捕える時には、相手の力にかかわらず全力で

注ぐ事を譬えとして挙げ、御本尊様をしたためる場合も師子王に劣らず全力を込めて認めているのである。よつて、この御本尊様をよくよく信じなさいと御指南あそばされています。しかし、「法華経の剣は信心のけなげ(健気)なる人こそ用ふる事」と仰せられるように、祈りを成就するためには無疑曰信(むぎわつしん)の信心、心に疑いなく信行する事が大切であります。信心の基本である勤行・唱題を真剣に唱えれば、必ず功德が頭れ、諸天善神に護られます。

御本尊様の功德について、総本山第二十六世日寛上人は『観心本尊抄文段』に「此の本尊の功德無量無辺にして広大深遠の妙用(みょうゆう)有り、故に暫(しばらく)くも此の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱ふれば、祈りとして叶(かな)はざるはなく、罪として滅せざるはなく、福として来らざるはなく、理として顕れざるはなきなり」(文段一八九頁)と、明快に御指南されています。

最後に、佐渡配流が赦免となつたならば、さつそく鎌倉に赴き、経王御前の母に会う事を約束され、さらには経王御前の事を強盛に祈念している事を述べて本抄を結ばれています。本抄は経王殿の母のみならず、大聖人様の信仰をしている私たちすべての者に対して与えられた尊い御書として、拝していただきたいと存じます。(文責・編集部)